

## 年間第32主日

イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとして歩き回ることや、広場で挨拶されること、<sup>39</sup>会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、<sup>40</sup>また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

マルコ12・38-40

今日与えられた福音の箇所では、律法学者とやもめという当時の社会の中で最も対極に位置する人たちにスポットが当てられています。律法学者は当時のエリートです。神から与えられた律法を解釈し、教え、そして律法に基づいてさばく裁判官の役割を持っていました。彼らは長い衣をまとして歩き、「先生」と挨拶されるのを喜びとして、会堂では上席、宴会では上座に座ることを求めました。

「先生」と呼ばれているうちにいつのまにか、自分たちは優れた者だ、尊敬されて当然だと思うようになったのでしょうか。その律法学者に、イエスはこう言われました。「あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。そのあなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ」（マタイ23・8）。イエスは律法学者たちを批判することを通して、それこそ反面教師として示すことで私たちにも大切なことを教えておられるのです。

更にここでイエスが律法学者をめぐる問題としているのは、律法学者が自分がすぐれていること、**律法についてよく知っていること**をひけらかし、虚栄を張っていることだけではありません。**それと同時に**重要でないとおもわれている人や、経済的に恵まれない人々を見下す律法学者の態度を問題としているのです。

イエスは、律法学者が宗教的**指導者の**立場を利用して弱い人々を食い物にする、その偽善のメカニズムをあばいています。イエスはこの教えを弟子たちの心にはっきりと刻むために、対照的な模範として、彼らに貧しいやもめの姿を示しました。

やもめは、その生きる権利を守ってくれる夫を亡くし、高利貸しなどの犠牲になりやすい弱い立場におかれていました。社会でも弱く取るに足らないと見なされる立場にありました。

イエスは、このあとひとりのやもめの話をしています。（マルコ12・41-42）

このやもめは賽銭箱に、自分が持つ**すべて**である、銅貨**2枚**を入れました。まさにこのやもめの、謙虚で、大きな信仰を示す犠牲の態度が、イエスの目に留まることになりました。

イエスの教えは、わたしたちの人生において何が一番大切なのかという人生の本質を思い起こさせます。また、この教えは神との絆を具体的な形で私たちの日々の生活において強めることを助けてくれます。

主が判断されるはかりは、わたしたちのものとは違います。主は人とその態度を異なるはかりで量られます。主は量ではなく質をごらんになります。私たちの心を探り、その**行為**や意図の純粹さをご覧になります。

この教えは、わたしたちが祈りを通し神に捧げる態度、愛徳の業を通して隣人に捧げる行為について言われています。その態度や行為が形式主義や計算を超えたもの、つまり無償のものでなくてはならないことを意味しています。

イエスが、貧しくても持っているものすべてをささげたやもめを、キリスト教的生活の模範として指したのはこうしたわけであります。わたしたちはこのやもめの名を知らなくとも、神の御心にかなったその心を知っています。

わたしたちが神と兄弟たちに、自分そのものを、謙虚にすべてのものを捧げることができるよう、神に自らの持っているもの全てを捧げた貧しいおとめマリアを通して神に祈りましょう。

